

さだみさき 佐田岬の 小さな小さな 郷の物語

特集5

～「喜久家プロジェクト」 若者ボランティアと共に 郷づくり～

喜久家プロジェクト
おさむ
浅野 長武
(伊方町)



右が私、浅野長武。
左は、三崎中学校の生徒「小田寛之」君。
喜久家プロジェクトの活動には、「青少年の自立支援」「農業体験の受け入れ」もある。小田君も農業体験をした1人。
喜久家プロジェクト代表は、浅野洋海

「ありがとうございます。行ってきます。」
「行ってらっしゃい。体に気をつけて。」
これは、若者ボランティアたちの旅立ちの朝のやりとり。お互い、涙で声をまらせた。
私のふるさととは、四国最西端の伊方町平磯。日本一細長い佐田岬半島13里の先端にある。世帯数17戸、人口50人足らずの小さな小さな郷。そのほとんどは、清見タンゴール、甘夏柑、デコボン、伊予

柑などの柑橘農業で暮らしを立てている。
海から空へとつづく段々畑は、海拔200メートル以上にわたり、碧石の石垣に支えられている。先祖が一つ一つ海岸から背負って運び上げ築いたものだ。「農業という生産のカタチがしっかりとした地域は、地域のカタチもしっかりとしている」と言われるが、土を愛する平磯の人たちは、まじめで温かい。このふるさとの良さを感じるまでに長い時間がかかった。自分の中のものさしが、便利か不便かばかりにとらわれていた気がする。
一方で、人口は減り続け、空き家や作り手のいなくなった畑が多くなっている。



三崎中学校でのワークショップ

「郷の良さを守り、もつと元気になっていきたい。」
そんな思いから「喜久家プロジェクト」若者ボランティアと共に郷づくりが2年前の07年2月にスタートした。郷の再生と創生を目指し、若者ボランティアを国内外から受け入れ、一緒に取り組んでいる。空き家を借り受け、家主の名前をとって「喜久家」と名づけた。喜びがずっと続いていきますように、という願いもこめて。
若者たちは、喜久家で共同生活を送る。炊事などを分担し、仲間を気づかい、時にはぶつかり合いながら、絆を深めていく。日中は、受け入れ農家と一緒に農作業をしながら、様々な話に花が咲く。今まで他人のうわさ話が多かった地域の人の話題が、東京・台湾・韓国・ドイ



ちょっとひと息



収穫も慣れた手つきで

帰り道の間ずっと、平磯でのことを思い出しながら帰っていました。今日、千葉は天気がとてもよくて、「今日は収穫日和だな。みんながんばって作業をしているんだろうな。」なんて考えていました。

みなさんの、少しでもこの平磯を元気にしたい、後世に残していきたい、という思いに応えたくて、一生懸命手伝いをさせてもらいました。みなさんが故郷のためを思い、こういう行動を起こしたからこそ、僕はこういう場所に来ることができて、みなさんや仲間と出会い、一生忘れられないような経験ができたのだと思っています。

平磯での生活がきっかけになって、僕の住んでいる、千葉や東京の良い部分も見つめなおすことができそうです。今回のワークキャンプのように、それぞれの地域間の交流を増やして、田舎と都会の両方が、お互いの良い部分を見つめ合っていければ、僕たちの将来も明るいものになっていくのではないのでしょうか。

これまで、家族のようにいろいろとお世話をしてくださり、本当にありがとうございました。また、平磯に帰れることを楽しみに、日々の生活を頑張ろうと思います。

この2年間で20名の外国人と50名の日本の若者が、郷づくりに関わってくれた。最初は農作業だけだった活動も、学集まり、語り合う。

ツ・アメリカ・イギリスなどの話へと広がっていく。また逆に、どんな思いで農業をしているかや夢、地域の様子について語って聞かせる。中には、韓国語を若者から教えてもらい、会話を楽しむ人もいる。時には、野菜やおかずのおすそ分け。時には、家に招いての食事会。そして喜久家には、地域の人ももちろん、地域外からもいろいろな人が集まり、語り合う。



地域の人との交流

ものを取り入れながら変わっていく。佐田岬の小さな小さな郷の大きな大きな物語。そこには、ふるさとの明るい未来があるような気がする。

Yes, We can.

校訪問・清掃活動・地域行事への参加など次々と広がっている。

左の文書は、旅立った若者から送られてきたメールである。

若者たちとの新しい出会い・つながりは、これからも続いていく。そして地域のカタチも新しい